

Computer Report

Vol. 59 No. 5 5月号 (通巻 776号)

はじめの言葉

■イチロー選手の現役引退を聞くや、早くも日本政府は国民栄誉賞の授与をオファーしたようだ。イチロー選手の人気にあやかりたい勢力が早くも動き出したというわけだ。賞を授与してやるという権力の中枢側の立場にしながら、実は、対象者の側の名誉に縋りつくしか能がないお粗末な正体をさらけ出す格好になっている。今後の展開はどうかは別にして、イチロー選手による同賞オファーの辞退は、三度目になる。

■天皇の生前退位による次代天皇への継承を前に新元号令和が発表された。平成の元号発表は時の内閣官房長官小渕恵三氏だった。これに倣って今回も官房長官による発表だとされたが、それで終わらず、続いて安倍晋三内閣総理大臣の発表会見があった。何につけても便乗／悪乗りしてまで目立ちたがりたい存在が印象づけられる。イチロー選手へ国民栄誉賞を与えたいとする動きと等価である。「他人の褌・・・」にも劣る。

■日本国家のトップをして、すべからく、寄らば大樹の姿勢では、世界政治の舞台では、それなりの評価、対応がされて当たり前である。周辺隣国からも侮られているのもむべなるかな。自国一番の象徴となっている米国トランプ大統領だが、自国一番の流れはアメリカだけでなく世界各国で巻き起こっている社会現象である。だからアメリカ迎合姿勢に悪乗りを重ねての日本第一表明も、大いにあり得るかもしれない。

■国家としての自立は、常に国家の基本テーゼであり、大命題である。自立の精神は、自主独立の心に裏打ちされる。他への頼み／頼りの心根、追随／追従の心は、強く否定して臨む必要がある。奇しくも天皇退位によって元号が変わった。弱いものに強い国家ではなく真に強く堅牢な国家を築く契機となってもらいたい。単なるお祭り騒ぎだけの新天皇即位ではなく、改めて日本国の国家像を国民一人ひとりが思い描く機会になればと思う。

■平成の御代の終焉にあたり、戦争の無かったことに安堵していると述べた前天皇だったが、終戦後から 70 年余にわたって日本は国を挙げての戦争に巻き込まれずに来た。油断大敵というが、その間、周辺隣国は軍事的勢力を増強させてきている。その分、我が国の国家リスク／危機は高まってきているのかもしれない。象徴天皇の存在、戦争放棄を憲法で謳い上げてきたことの様々な成果、歴史的効果がもたらされているのだろう。

■少子高齢化が色濃く表面化し、団塊の世代が労働戦線から引き去った我が国産業界は、極度な労働力不足に見舞われている。一方で、高齢者層／要介護者層の増加に、介護人の人的資源不足が、ますます深刻な状況となっている。人口構造としての生産労働者不足問題は、現政権の一時的な政治課題ではなく、日本の将来設計に関わる国家的課題である。この打開策として外国人移民労働者受け入れが取り沙汰されているのは周知の通り。

■ここで忘れてはならないのは、今日的に世界規模で起こっている自国第一／自国民最優先主義の背景は、各国が過去に採ってきた労働者不足解消のための移民受け入れ政策の結果だということ。自国の長期的人口問題に対して根本的な解決策を講じることなく、刹那的／姑息な移民政策に各国が頼ってきたことのツケが廻ってきていること。極度な労働人口不足に直面している日本、安直な各国追随／追従は、厳に慎んでももらいたい。(藤見)